

“アーカイブ”のコーナーでは、過去さまざまなメディアで取り上げられた情報を再度紹介していきます。

「モミガラ堆肥で最高のチンゲンサイ」 新潟県新潟市・長谷川正義氏

日本種苗新聞 2006年7月1日



上・チンゲンサイを試食する宇佐美さん（元・マラソン五輪代表）
中・モミ殻堆肥を年間50 t 以上つくる
下・堆肥の作り方を農家に教える長谷川さん

日本には、大根やハクサイをはじめ多くの野菜が中国経由で渡来している。特に一九七〇年代になると、日中の国交が回復し、新しい中国の野菜が次々と入ってきた。その中で、一番定着したのがチンゲンサイである。

原種はヨーロッパ産の「アブラナ科」で、青梗菜は、梗（軸の意味）が青いところからその名が付けられた。チンゲンサイには、葉から根元にかけて全体に緑色を帯びた青梗系と、葉柄は緑で根元が白い白梗系がある。産地では青梗系をチン

ゲンサイ、白梗系をバクチンサイと呼び、日本でも踏襲されている。新潟市黒埼地区では、十軒の農家がチンゲンサイを栽培している。NHKが取り上げたのは、市場で高い評価を受けている長谷川正義さん（去年放送時五四歳）。

長谷川さんの作るチンゲンサイは水分をたっぷり含み、柔らかく、苦味がなくて甘い。そして菌切れがよく、みずみずしい食感がする。ゲストの宇佐美彰朗さん（元マラソン五輪代表）は「野菜というより、果物という感じがする」と表現

する。「チンゲンサイを作るきっかけ」長谷川さんは米の減反で、大根やネギなどを作ったが、満足できるものが作れなかった。そこで、農業の基本である土作りから始めようと決意した。稲ワラで堆肥を作るが、うまくいかず、モミ殻で堆肥ができないかと試行錯誤。微生物を含んだ土壌改良材を使って、固くて分解しにくいモミ殻の堆肥を作るのに成功。その

モミ殻堆肥で最高のチンゲンサイ NHK「たべもの新世紀」で学ぶ

日で、堆肥が出来上がる。匂いは甘い、アミノ酸のよ
うな匂いで、都会の真ん中
でも大丈夫」と推奨する。
更に微生物を聞くと、「ブイ
エス科工株の V S 34」とい
う。

堆肥で、葉物野菜がうまく
できることが分かった。

黒埼地区は穀倉地帯で、
雑木林や酪農家がなく、堆
肥の材料になるようなもの
がない所。一方モミ殻が大
量に出され、一部は牛の飼
料に使われるが、多くはそ
の処理に困っていたのが実
情。モミ殻を堆肥にしよう
とする長谷川さんを、当初
周囲の農家は、批判的に見
ていたという。

【モミ殻堆肥の説明】

長谷川さんに堆肥につい
て取材すると、「モミ殻に米
ヌカと窒素成分を加え、そ
れに微生物を混ぜて分解さ
せる。微生物が窒素成分な
どを餌にして、植物が吸収
できる無機物を作る。四十

分解しきれずに形が残る。
出来上がった堆肥は、そ
の中に空気を含み、土に混
ぜると、土が軟らかく、弾
力に富み、土壌の物理的性
質をよくする。ふかふかす
る柔らかい土は、根を自由
に張り巡らせる。その結果
根は分解された地中の栄養
を効率よく吸収できる。す
なわち、形の残ったモミ殻
堆肥土壌は、気体や水分を
保持し、土壌中の生物のよ
いすみかになり、植物の成
長にとっても、好適な環境
を提供するのだ。

V S 34は、無機質の鉱物
質系であるバームキユライ
ト(蛭石)に放線菌、細菌
糸状菌、酵母等の有効微生
物を培養吸着させた土壌改
良材である。V S 科工のモ
ミ殻堆肥の作り方を見ると、
モミ殻：千kg、稲ワラ：水
保ちのため少々、油カス：
百kg、米ヌカ：百kg、V S
34：五十kgで、約二トンの
堆肥が四十日で出来上がる。
昔はモミ殻の代わりに、
オガクズを材料にしていた
という。V S 34に含まれる
細菌はバチルス他、放線菌
はストレプトミセス、真菌
はアスペルギルス(こうじ
かび)、ペニシリウム、ム
コール(けかび)、イースト
等である。

N H Kの調べでは、モミ
殻は病害虫や風雨から実を
守るために、固くて分解し
にくい性質に作られている。
その固い性質のため、微
生物を使って堆肥にしても、

【社会的貢献を果たす】

長谷川さんは農家の人に
見学させて、モミ殻堆肥の
作り方や素晴らしさを教え
ている。成功体験を自分ひ
とりだけのものにせず、積
極的に開示する。長谷川さ
んは社会的意識の高い、素
晴らしい人物である。また
静岡や石川県の大きな農家
と交流して、栽培方法や品

種などの情報交換をしてい
る。それは、もっとおしい
いチゲンサイを作るとい
う、強い向上心からである。
今では二人の息子も、チ
ンゲンサイ作りの魅力を感
じ始めたという。

後継者の育成にも成功し
ているのだ。事業が成功し、
事業に社会性があり、事業
の将来が明るいものであれ
ば、後継者が育つ事例であ
る。新潟県内にはチューリ
ップを栽培する農家が多い。
長谷川さんの堆肥で、チ
ューリップの栽培を始めた
農家も増えてきたという。

長谷川さんのケースは、
産業廃棄物を利用した循環
型農業の成功の事例である。
新潟県だけでモミ殻が、
年間十五万トンでるとい
う。地球環境を守るためにも、
全国にこのような循環型の
農業が、広まって欲しいも
のである。